

「ジャーナリズムでは中立性が大事」と言われるが、その解釈は間違っていると思う。中立とは、物ごとの真ん中あたりを指す、位置的な概念に過ぎないからだ。

2月10日に新潟日報メディアシップで開催したイベント「ジャーナリストカフェ in 新潟」では、ジャーナリストの役割をめぐって議論が白熱した。ご紹介したのは、私自身の青い発言の一部である。

少し説明を加えよう。例えて言えばこういうことだ。ある国と戦争を構えようかという時に、「先制攻撃でショックを与え、有利な交渉を持ち込む」という意見と、「徹底的に相手を壊滅する」という意見が対立したとする。



ジャーナリスト 大越健介

# キヤスターEYE

そこで、「先制攻撃で相手が交渉に応じないような結果的に敵の壊滅もあらうべし」と、足して2で割った中立的な意見を吐いたとする。その場は収まる

## ジャーナリストカフェ

# 地方にこそ現場はある

ゆかりのジャーナリストたちがパネリストとなり、参加者たちとの双方向の対話が繰り広げられた。前列に陣取った学生たちから盛んに質問が飛び、そのうちの一人は、価値観の変化に切り込んだ。「中道や正義のあり方は、

かもしれないが、「そもそも戦争はすべきでない」という、当たり前視点の置きかえに、新新潟日報社と私が共催する形で立ち上げたものだ。ジャーナリストを志望する若い人たちが、あるいはこの仕事に関心のある人たちに参加を呼びかけたところ、120の定員は満席となった。だからそこにしっかりと釘を刺すのがジャーナリズムの仕事なのだ。中立ではなく、環境に左右されない絶対的な良心。中道とい

時代とともに変わるのである。イベントの後、パネリストとして招いたベテランのジャーナリストがつぶやいた。「学生が真剣に向き合ってくれて本当に良かった。彼は東京などいくつもの大学でジャーナリズムの講義を持っているそうだが、マスコミを「マスゴミ」呼ばわりし、露骨に嫌悪感を示す学生も少なくないと言った。SNSという発信手段が日常化した彼らは、ある意味手ごわい存在だ。だがマスゴミは、電気や水道と同様、社会の貴重なインフラでもある。そして、良いインフラでありたいと汗を流すジャーナリストたち。一定のリスペクトを持って向き合ってくれた新潟の若者たちの姿が、とても嬉しかったと言った。私にも同感だ。毎日のキヤスターの仕事は忙しい。しかし、私はこうした取り組みを、今後も地方都市を中心に展開していきたいと思っている。なぜなら、地方のニュースはイコール、ローカルニュースなのではない。むしろ日々の課題は、地方に身を